

包摂の歴史

シンガポール国立博物館におけるケース・スタディ 2006-2015

History of Inclusion :
National Museum of Singapore, 2006-2015 a, Case Study
LEE Chor Lin

リー・コー・リン

はじめに

シンガポール国立博物館は、東南アジアにおける「知」を収め、英国植民地（英領マラヤ、ボルネオ半島のサバ州・サラワク州など）を紹介すべく、1887年、英国の植民地政府（1819-1963年）によりラッフルズ博物館として創設された。同館は、自然史や民族学に関する収蔵品のほか、先住民のアートや工芸品でその名を知られるようになった。1965年にシンガポールが独立を果たした後、ラッフルズ博物館はシンガポール国立博物館に名称を変え、1996年までシンガポール唯一の博物館として存在した。その後、同館から枝分かれする形でシンガポール美術館とアジア文明博物館が開館し、シンガポール国立博物館はシンガポールの歴史に焦点を当てた博物館となった。2003年に入り、時代の流れに対応するとともに、来館者の要望に応える形でシンガポールの歴史を総合的に展示するため、大規模な改修が必要となった。

1984年から1995年までのシンガポール史の展示

シンガポール史に関する書物はこの20年間で多様化してきたが、博物館における歴史展示という意味では、さほど大きな変化は見られなかった。1984年、国立博物館は大規模改修を行い、シンガポール史の叙述を導入すべく、ギャラリーに20台のジオラマを設置した。各ジオラマは歴史的に重要な時代の一瞬を切り取ったスナップ写真のようなもので、近代シンガポールの父として尊敬されるスタンフォード・ラッフルズ卿（1781-1826年）の1819年のシンガポール上陸など、特別な政治的出来事も展示された。⁽¹⁾

ただし、これらのジオラマは、英国がシンガポールを植民地として支配し始めた1819年からシンガポールが独立を果たした1965年までの歴史に焦点を当てたものであって、1965年以降、ギャラリーが開設された1984年までの期間の展示については改修されなかった。当時のシンガポール史は、学校で使用する標準歴史教科書も作成していた教育省が策定したシラバスに忠実で、政治的に定められた公式に則って描かれていた。

シンガポールの独立30周年を祝う1995年、国防省は自らが主導し、国際的な展示デザイナーの

協力を仰いで、大規模な体験型展示の制作を依頼した。「シンガポール・ストーリー」と題したこの展示では、「エデュテインメント」（教育＋エンターテインメント）として人気のテーマパーク的手法を活用した。映画製作の中で磨かれたストーリーテリングの手法を用いて楽しませることを重視したもので、その根底にあったのは、効果的な学習は楽しいという感情に浸ってこそ期待できるという強固な信念であった。最も活用された手法のひとつは再現である。本物の俳優や映像と音声の装置、オブジェクトシアターなどの手法により来館者をシンガポールの節目の出来事に案内し、1965年を始まりとするシンガポールの歴史がいかに短いか、天然資源に恵まれず、また敵対する諸国に周りを囲まれた小さな島が、国家を建設する上でどのような難題に立ち向かったのか、といった点に来館者の注意を向けさせた。

ただし、この語りには解釈の上である程度の操作が加わっていた。例えば、この展示を担当したキュレーターは、近代以前のシンガポールを地理的重要性のない平穏な漁村として描き、シンガポールがもともとそれぞれの時代の地域的権力に従属しており、19世紀シンガポールの経済的なライフラインや政治上の地位が、14世紀のマジャパヒト王国（東ジャワ）や16世紀から19世紀にかけてのジョホール王国とリアウ・リング王国が支配する河川・海上交易網に深く根ざしていたという事実を認めなかった。この事実を認めてしまうと、この土地に先住マレー人による支配体制が存在していたことを容認することになるからだ。これらの王国は、ラッフルズ卿によって権力を奪われた上、マレーシアの王朝や独立後のインドネシアのスカルノ政権を巻き込んで領土・主権争いを繰り広げ、1965年以降にはシンガポール政府によって更なる衰退の憂き目にあっていた。また、英国の植民地支配におけるシンガポールの役割を重視しつつも、アジア・太平洋戦争のさなか、1942年2月の日本の侵攻については、シンガポールを守るはずの英国が、いかに無責任であったかという点を強調した。その一方で、日本が降伏した直後の混乱と混迷の時代に乗じて、貧困に喘ぐ漁村のイメージを戦後のシンガポールの姿へと変えることで、人民行動党率いる政府こそ、今日私たちが知る近代的で新しいシンガポール―平和かつ進歩的で繁栄していると同時にしっかりと守られている国一の正当な建国者であるとする叙述に説得力を持たせた。この展示は、マルチメディアを用いつつも単線的な理解に立っていた。しかし、私が2003年から2006年にかけて博物館の改修に携わる際の歴史ギャラリーの計画・設計は、これとは対極をなすものであった。

生まれ変わったシンガポール国立博物館

計画・設計・構築・設置までに3年以上を費やした歴史ギャラリーは、約1,000平方メートルの広さに1,000点以上の展示物を陳列し、来館者に貸与される携帯端末には8時間分に相当する音声ガイドが収められている。従来の歴史展示とこのギャラリーの最大の違いのひとつは、シンガポールの歴史叙述を1300年頃まで遡らせ、通常シンガポールの人びとが考える時点より600年ほど前にしたことである。対象とする時代を長くしたことで、東南アジアにおける貿易の動向を考察し、シンガポール島を古いジャワやシャムの文脈の中で位置づけ、後のジョホールやリアウ・リングというマレー族の勢力圏との関係を詳述し、14世紀のテマセックと呼ばれるマレー族の王領の存在を説明することが可能になった。これまでテマセックについては標準歴史教科書でも注釈の中で簡単に触れる程度で、14世紀末期の元朝の商人である汪大淵が著した旅行記『島夷志略』や「マレー

年代記」(Sejarah Melayu)のような歴史的文献、あるいはフォート・キャンニングにある14世紀の遺構やシンガポール川河口から発掘された考古学的資料によって蓄積されてきた情報に基づいて明確に説明したものはなかった。⁽²⁾

また、シンガポール史の文脈を広げることで、さまざまな方法、切り口、視点から歴史を深く理解できるようにもなった。歴史の中に多様な側面を見いだそうとする私たちの試みは、同時に2つの見学順路を作りだすことにつながり、これにより物事には常にもうひとつの側面があるというメッセージを来館者に伝えることとなった。

ギャラリーは2つの見学順路によって大きく分けられている。ひとつは「H」と表示され、年代順に歴史を辿る「イベント・パス」で、基本的に男性の視点に立った公式に語られる歴史である。もうひとつは「パーソナル・パス」で、公式見解とは異なる情報や視点を来館者に提示する。2つの順路の間には小さな通路が作られており、来館者はイベント・パスとパーソナル・パスの間を行き来しながら展示や語りを見学することができる。こうして来館者は無意識のうちに両方の順路を行き来することになるのだが、それこそがまさに私たちの意図するところであった。というのも歴史は一直線に発展してきたわけではないからだ。

従来とは異なる私たちの手法は、1819年1月29日に上陸し、近代シンガポールの父として尊敬されているスタンフォード・ラッフルズ卿の展示の中に最もよく表れている。ここではラッフルズ卿について、妻のソフィア・ハル(1786-1858年)、最大の敵ウィリアム・ファークアー少佐(1774-1839年)、そしてイギリスに権力と主権を奪われたマレーのスルタンそれぞれの視点から語られている。こうした語りはラッフルズ卿の偉大な成功の影に埋もれ、明解でわかりやすい物語を描くために隠されていたものである。シンガポール史を標準教科書で学ぶと、ラッフルズ卿のシンガポール駐在期間が、1819年にスルタン・フセイン・シャー(1776-1835年)と条約を結んでから通算で3年にも満たなかったことをつい忘れてしまう。実際には条約を結んですぐに、ラッフルズ卿はスマトラ島の英領ベンクーレンに戻り、総督として任務に専念している。その際、ラッフルズ卿はシンガポールの統治にウィリアム・ファークアーを任命したのだが、資金も統治の支援もなかったファークアーがどんな困難に直面したか、誰も考えが及ばなかったであろう。われわれの歴史展示では、1819年から1822年はファークアーの物語となっており、ファークアーが、その親しみやすい人柄と、地元の多様な民族で構成された経済社会との友好的なネットワークによって、シンガポールを輝かしい発展に導いたことを紹介した。ファークアーの統治はおおよそ計画的とはいえないものではあったが、その間シンガポールの人口と貿易は急速に伸びた。ラッフルズ卿とは不和になったが、シンガポールを離れる際には地元の商業団体から多くの品物がファークアーに贈られた。

ラッフルズ卿が近代シンガポールの父であるという従来の見方は、未亡人となったソフィア・ハル夫人による優れた宣伝活動の賜物であった。夫人が上下2巻の回顧録『Memoir of the Life and Public Services of Sir Thomas Stamford Raffles』を著し、ジャワ、スマトラ、シンガポールでの夫の活躍を詳述したことで、ラッフルズ卿は近代シンガポールの建国者として広く認知されるようになったのだ。実際、ギャラリーで来館者が知るのはラッフルズ夫人の視点である。一方、スルタン・フセイン・シャーの視点はそれよりも長い期間を捉えた複雑なものである。その悲劇の物語は、マレー族王宮に内在する後継者争いと権力争いによるところが大きく、その展示のためにマレーの伝



Source: National Museum of Singapore.

統的な物語形式を用いた寸劇の制作を依頼した。こうすることで、私たちはマレー族の王宮の人びとの個性を含む複雑な場面を作り上げ、彼らの権力が、武力で台頭してきた欧州諸国を前にいかに衰退したかを見せることができた。その寸劇は英語で書かれてはいるもののマレーの詩のリズムを模しており、1819年の出来事の虚しさを、皮肉を込めて描いた内容であった。こうしてラッフルズ卿を中心に据えたシンガポール史の描き方は覆されたのである。当然のことながら私たちは、正統派や教科書寄りの人びとから、ラッフルズ卿の偉大さを軽視したとの批判を受けた。

こうして現在のギャラリーでは、600年に渡るシンガポールの歴史を、社会的・経済的に異なる立場の人びと一女性、子ども、征服者と被征服者、体制側と反体制側、主人と使用人一の目を通して描きだしている。歴史の語りの登場人物はみな、公文書や歴史的文献、調査インタビューの中から掘り起こされた人びとである。

また、古い時代のシンガポールを来館者に見せるため、現代アーティストのホー・ツーニエンに依頼し、多額の費用をかけて270度の視界で鑑賞できる短編映画『Sejarah Singapore (シンガポールの歴史)』を製作した。映画は同氏が数年前にシンガポールの起源に関する伝説や真実を織り交ぜて製作したいくつもの情景をもとにしたものである。先述した中国の汪大淵による『島夷志略』、『マレー年代記』、そしてポルトガルのトメ・ピレスが著した『東方諸国記』から集めたさまざまな情報を組み合わせ、映像としてひとつにまとめあげたのである。オーディションに応じてくれた一般市民も参加し、シンガポール全土で撮影が行われた。作品は素晴らしい出来栄で、瞑想的な情景はいにしへの語られざる歴史の雰囲気を見事に捉えたものとなった。

ギャラリーの展示物は、緊張感を与えるための強力なツールとして利用された。インタビューから採った音声クリップは、歴史上の事件に個人の視点を入れる上で極めて重要で、これによって人間の物語として情緒的な面を呼び起こすことができた。また、植民地統治側と急増する住民との間に起きた境界線と市街地における公共空間の使用を巡る争いを説明するために、イギリス人総督を

描いた3枚の威圧的な肖像画のすぐそばに、広さにそぐわないほど巨大な霊柩車を設置した。1942年の日本軍によるシンガポール北部からの侵攻については、日本軍兵士が使用したラレー自転車を何台も連ねて展示することで、密かに迫りくる脅威を表現した。

2006年の時点でもなお歴史に拒否感を示すシンガポール人は多く、歴史に詳しくない来館者は歴史ギャラリーの規模に圧倒されてしまうかもしれないと考えた。そこで、そのような来館者が適度にかつ部分的でも歴史を理解できるように、文化とライフスタイル—ファッション、フード、写真、映画（エンターテインメント）—をテーマとする4つのギャラリーを開設した。これらのギャラリーでは、移民、文化融合、民族の多様性、家族構成などの社会的な課題を大きく取り扱っているが、大まかに主題にそった叙述にとどめ、歴史を時系列に沿って説明してはいない。例えばフードギャラリーでは、政治的な理屈は一切抜きに、多民族の移民国家であるシンガポールのルーツを深く掘り下げた。シンガポール人の食に対する情熱を踏まえ、シンガポールのストリート・フードのルーツを探り、移民社会の豊かな歴史的背景を説明した。写真ギャラリーは膨大な写真資料の収蔵品を展示するために作られたが、最終的に私たちはシンガポールの歴史における家族の多様なあり方について議論していくこととなった。映画とエンターテインメントのギャラリーは、20世紀初頭に人口が急増する中、人びとが大道芸や遊園地、映画館を楽しむ様子を紹介する良い試みとなった。さらにファッションギャラリーは現代シンガポールの女性のアイデンティティを探る素晴らしい空間となったのだが、その背景には1960年から1970年代にかけて、経済発展を標榜する国家に应运えて立ち上がった大勢の女性が労働市場に参入したという歴史があった。家庭での平穏な生活から外の世界に飛び出した女性のファッションは、社会的背景や経済状態、民族性、価値観を越えて自らを発見する旅でもあったのだ。

この4つのギャラリーは、歴史の中の相対的に明るい側面を示したものである。しかし、たとえ来館者が重大な事件を取り上げた大規模な歴史ギャラリーに行かず、このギャラリーだけを見学しても、シンガポールの歴史を多様な視点から理解できるようになっており、シンガポールの歴史が、豊かさと複雑さ、多層的な語りをもつ歴史として探求されてきていることを認識できるだろう。

歴史ギャラリーとライフスタイルギャラリーのいずれにおいても、アーカイブ資料の中でも特に音声・映像素材を多用した。これらによって展示物や語りに直接感情が入り込む。オリジナルの音声を利用できない場合には、テキストを読み上げる声優を慎重に選定して、物語の世界を適切に表現した。

展示内容は、これまでに私たちが手がけたどのギャラリーよりも濃いものとなった。当然ながら調査、執筆、設計に加えて非常に複雑な制作プロセス（アーティストの選定、キャスティング、台詞、ポストプロダクションなど）に多くの人が関わることとなった。ビジュアル・アーティスト、コンセプチュアル・アーティスト、作家、俳優、エキストラ、声優、映画監督、小道具・衣装担当など、総勢450人以上が、キュレーター、展示ストーリーの作成者、デザイナーからなるチームと共に作業を行なった。このプロセスでキュレーターは、単に指示を出すのではなく、アイデアをもつ多彩な人びとと創造的研究プロセスを共有しなくてはならず、その結果、ギャラリーを成功させることができた。

シンガポールの歴史における女性の立場

シンガポール共和国の歴史は1965年頃に始まったので、一般的な建国の物語に続く短い50年については、歴史学者や博物館のキュレーターは語る内容が尽きてしまう。しかし、4つのライフスタイルギャラリーを新設したことで、私たちはシンガポールの歴史を描く新たな方法を作り出すことができた。幸い20世紀初頭になってシンガポールが国際的な港湾都市として急速に発展すると、貧困地域に暮らす多くの移民が職を求めてシンガポールにやって来た。それは男性に限らず、家庭の事情でシンガポールに来て労働者になる女性も多かった。その中でもよく知られている集団のひとつが建設現場で重労働に従事したサムスイ・ウーマンと呼ばれる女性労働者である。彼女たちは中国広東省の山水区から出稼ぎに来て、仕事のときには皆揃って赤い特徴的な頭巾を被り、黒っぽい綿の服を着ていた。また同じく広東省の順徳区から出稼ぎにきた女性たちは、英領植民地の香港、シンガポール、マラヤで家政婦として働き、みな黒いズボンと白いブラウスを着ていた。こうした象徴的な女性労働者のほかに、1960年代から1970年代にかけては大勢の女性が工場で働いたり、職業訓練を受けて裁縫師や教師、事務員、秘書になったりしてシンガポールの労働市場に参入し、新政府の求める経済成長を支えた。こうした事実は博物館の展示テーマを考える上で重要なトピックとなった。

現在、シンガポール社会は地域社会の遺産に対して強い関心を寄せているが、これは公式に認められた見方とは異なる事実や側面を提示する歴史の大切さを証明するものである。政治や重大な決定に関して、市民参加の機会が広く開かれていないという独特な状況の下、公式的な枠組みの外で地理的・歴史的ルーツを再構築する作業は、多くの有権者が政治的に覚醒するひとつの道筋となっている。シンガポールの人びとが歴史を語るための、より多くのチャンネルを作り出したという意味で、私たちは良い仕事をしたと言えるのではないだろうか。

博物館における女性の立場

2003年4月、私はシンガポール国立博物館の館長に正式に就任したが、そのことはシンガポールの芸術・文化の世界に少なからず波紋を呼んだ。40歳という歴代最年少での就任であったばかりでなく、初の女性館長でもあったからだ。それまで館長の職は男性が務めていた。ニュースにもなったことで熱烈な歓迎を受け、新聞の記事も肯定的であった。振り返ってみれば、私が女性だったからこそ、メディアも市民も比較的寛大かつ好意的であったと考えざるを得ない。こうして幸先の良いスタートを切ったことで、博物館に山積した問題に取り組む時間を確保でき、また博物館の大規模改修に必要なリーダーシップを発揮することができた。

ところが、この若手女性館長による新しいリーダーシップの下、見落とされていたのは、シンガポールの独立以来、館長としては私が初の博物館専門家であるという点であった。国立博物館は行政サービスの一環であり、この考え方は英国から引き継いだものであったので、館長の選任にあたっては、エリート層の信念によって、博物館の専門知識を備えた人材よりもエリート教育を受けたジェネラリストが優先されてきた。したがって、私以前の歴代の館長は博物館運営のスキルのない中級・



Source: National Museum of Singapore.

上級公務員であった。こうした伝統を打ち破る形で館長に就任した私には、知識と技術を兼ね備えたキュレーターの諸先輩の指導を受け、現場で研鑽を積みながら習得したキュレーションと博物館運営の18年にわたる経験があった。

実際、歴代の館長や私と同時期の他の博物館の男性館長には博物館での専門的な実務経験がなかったため、この専門知識こそが私の強みであった。それでも、改修プロジェクトに関わる建築士やエンジニアとの打ち合わせは、やはり緊張を強いられる時だったといえるであろう。幸い、私のキュレーターとしての識見と訓練が、設計上のラフなコンセプトを機能的な博物館施設へと作り変える上で十分に役立った。また、私の能力の足りない部分については、執行役員やアドバイザー、コンサルタントからなるチームを編成して補うことができた。博物館での実務経験がない館長には、図面を形にすることも、展示物を構成することも、物語の筋をまとめることも、構造物を機能的な施設に変えることもできなかったはずである。

このほかに直ちに取り組んだ仕事には、さらに長期的な忍耐と将来への深慮が求められた。博物館の職員全体を活性化させかつ再編成する必要があったため、職員の意識改革を行い、意欲溢れる人材を採用して人材基盤を拡充した。博物館での実務経験がない館長は、必要に応じて的確かつ有益な指導や明確な指示を与えることができなかったはずだ。また、収蔵品に関する実務知識がない歴代の館長や他の博物館の男性館長は、博物館の資源を活用することも、想像力を働かせることも、自らが計画・運営した博物館のあり方をわかりやすく説明することもできなかった。そしてキュレーションや展覧会開催の実績のない歴代の館長や他の博物館の男性館長は、提示された選択肢の質や正当性を評価し、問題が生じたときに専門的な解決策を示すこともできなかったのである。

2006年、女帝マリア・テレジア展を開催するにあたり、初めて提携を結んだウィーンの各美術館からキュレーターを招いた。訪れた女性キュレーターの多くはリニューアルオープンした博物館に女性らしさを感じ取ったという。それは私に対する個人的な誉め言葉であったが、博物館が高い

プロ意識と細部へのこだわりをもって作られていることを分かっていただけたのだと思う。もちろん、私が女性であることは否定しようもない事実であり、専門家としてのこだわりや視点も男性とは異なるであろうが、シンガポールの博物館という文脈の中で、シンガポール国立博物館で行った私の取り組みは、博物館の専門家が指揮を執る博物館の可能性を切り拓いたものといえるのではないだろうか。シンガポールのエリート層が支配する制度の下では、博物館の専門家としての矜持は必ずしも守られないものである。しかし私たちはそれを求めて闘う必要があるのだ。

註

(1)——ラッフルズは、オランダとスペインが東南アジア一帯に有力な交易場を発展させていたため、マレー半島に武装した貿易拠点を設置する場所を探していた。1819年1月29日、ラッフルズは英国海軍将校で編成された小隊をとともない、島をイギリスの領地として譲渡する条約を保証していたシンガポールの土候と会見した。その人物は、後に海峡植民地となるベナン、マラッカ、シンガポールを戦略的な足掛かりとしてイギリスに提供していた。

(2)——1820年に植民地の英国役人が「禁じられた丘」として知られたフォート・キャンニングを調査した際、すでに14世紀の集落の面影は見えてわかるものだった。しかし、最も早い考古学的発見は1928年にフォート・キャンノンの頂上に貯蔵庫が発掘された時になる。この時、14世紀の東ジャワ形式で作られた重要な金工品が発掘され、王族の集落の存在と、シンガポールは東ジャワにあったマジャパヒト王国の影響化にあったという見解が強く

なった。シンガポールにおける体系的な発掘調査は1984年ようやく初めて始まり、フォート・キャンニングの広域、シンガポール川の河口と下流域、19世紀の歴史建造物の下などが対象であった。シンガポールに関する考古学調査から得られた詳しい分析と説明は近年ミクスにより書籍化されている [Miksic 2018]。

(3)——前掲書 [Miksic 2018] 第4章、参照。

(4)——この光景は、著名な中国人ビジネスマンの死を弔う贅沢で混雑した葬式の行列を想起させる。そういう行事ではしばしば、交通妨害や騒音で公共の道路や空間が占領される。もっと日常的なレベルでは、商店が公共の歩道や路肩まで延長され、それはイギリスの植民地統治における土地や公共の場の使用を定めた法律違反でもあった。

(5)——彼らは中国の標準語で Sanshui (サンシュイ) と発音される三水區から来た。彼女たちの方言では Samsui (サムスイ) と発音する。

参考文献

- (1) Frost, Mark & Balasingham-Chow, Yumei. Singapore: A Biography. Singapore: National Museum of Singapore, Editions Didier Millet. 2010.
- (2) Lenzi, Iola. National Museum of Singapore Guide. Singapore: National Museum of Singapore, Editions Didier Millet. 2007.
- (3) Miksic, John. Singapore & the Silk Road of the Sea: 1300 – 1800. Singapore: National Museum of Singapore & NUS Press Singapore. 2018.
- (4) Raffles, Sophia. Memoir of the Life and Public Services of Sir Thomas Stamford Raffle, 1991 edition. London: Oxford University Press.
- (5) Treasures from the National Museum of Singapore. Singapore: National Museum of Singapore. 1987 Pires, Tomé. Suma Oriental.
- (6) Wang Dayuan 汪大淵. Daoyi zhilue (島夷志略). 1349. Various editions.

(リー・コー・リン 国立シンガポール博物館前館長)

(2018年12月7日受付, 2019年8月5日審査終了)

History of Inclusion

National Museum of Singapore, 2006-2015, a Case Study

包摂の歴史
シンガポール国立博物館におけるケース・スタディ 2006 – 2015
リー・コー・リン

LEE Chor Lin

The National Museum of Singapore was established as the Raffles Museum in 1887 by the British colonial government (1819 – 1963) as a depository of knowledge and a showcase of the British colonies in Southeast Asia, which included Malaya-Singapore, Sabah and Sarawak of Borneo. The Museum was well known for its collections of natural history and ethnographic specimens, as well as native arts and crafts. It became the National Museum of Singapore after Singapore's independence (1965) and was the only museum of Singapore until 1996, after which the Singapore Art Museum and the Asian Civilisations Museum branched out from the main collection, while the museum itself became the dedicated place of Singapore history. In 2003, this museum needed badly a major re-development, so that it would keep up with the time and that a comprehensive Singapore history could be presented in it in ways that would be appealing to the changing tastes of the audiences.

Presenting Singapore History in 1984 and 1995

Although the writing of Singapore history has diversified over the past two decades, the presentation of this history in a museum context has been less dynamic. In 1984 when the National Museum underwent a major revamp, so that the narrative of Singapore history could be installed, the museum did so with a gallery containing 20 dioramas. Each diorama was a snapshot of a historically significant time, sometimes a specific political event, for instance, the arrival in Singapore of Sir Stamford Raffles⁽¹⁾ (1781 – 1826) in 1819, who is venerated as the founder of modern Singapore.

These dioramas focused on the history between 1819, which is the British founding of Singapore as a colony, and 1965, when Singapore gained its independence. The period between 1965 and 1984, the date when the gallery was set up, would be left untouched in this display. Until then, Singapore's history was written according to a politically defined formula, following ardently the syllabus laid down

by the Ministry of Education, which also published the standard history textbooks used by schools.

In 1995, celebrating the 30th anniversary of our independence, the Ministry of Defence commissioned and lead the creation of a large experiential exhibition with the help of international exhibition designers. Entitled “The Singapore Story”, this exhibition made use of theme park techniques popularly sanctioned as ‘edutainment’, employing storytelling approached honed in film making and heavy with the aim to entertain, and supported by the strong belief that learning is best done through fun-filled immersion and emotive tantalisations. One of the most commonly used techniques was re-enactment. Real actors and devices such as sight and sound, object theatre were deployed to create and act out scenes of episodes to guide visitors through prescribed milestones of Singapore, with strong warning of the brevity of our history, now beginning in 1965, and of the perceived challenges of nation-building by a tiny island short of natural resources and yet surrounded by hostile neighbours.

Some interpretive manipulations were made in this narrative. For example, the curators of this exhibition portrayed pre-modern Singapore as a quiet fishing village of no significance, without acknowledging the fact that Singapore, originally a vassal state to the regional powers at different times, its economic lifeline and political position in 19th century were deeply rooted in the regional riverine and maritime trading networks controlled by the kingdoms of Majapahit (East Java) in the 14th century and those of Johor and Riau-Lingga between 16th and 19th centuries. To admit to this fact would be to recognise the existence of the native Malay ruling regime, which was made powerless by Raffles and further weakened by the Singapore government after 1965, while entering territorial and sovereign disputes involving the sultanates of Malaysia, as well as with the independent Indonesian government of Sukarno. Furthermore, the curators were too eager to downplay the role of Singapore’s British colonial experience and to emphasise British unreliability in defending Singapore from Japanese invasion in February 1942 during the Asia Pacific War. Instead, the curators seized upon the immediate dislocation and confusion in Singapore after the surrender of Japan, and transferred the poverty-stricken fishing village image onto post-war Singapore, so as to conjure up a persuasive narrative anointing the government led by the People’s Action Party (PAP) as the rightful creator of the modern and new Singapore we now know – peaceful, progressive and prosperous, but guarded and ‘fiercely’ defended.

This multimedia but mono-linear exhibition was the basis against which the new History Gallery was planned and designed when I was tasked to re-make the National Museum of Singapore between 2003 and 2006.

The new National Museum of Singapore

Taking up more than three years to plan, design, construct and install, the History of Singapore gallery covered a floor area of nearly 1000 square metres with more than 1000 objects displayed and eight hours’ of audio-visual content, which was contained in a handheld device given out to visitors.

One of the biggest difference this gallery made in the tradition of history presentation was to bring the narrative of Singapore's history back in time to around 1300, hence 600 years earlier than it would normally have made sense to an averaged Singaporean mind. With this extension of time, it allowed us to examine the dynamics of trading in Southeast Asia, to place the island of Singapore in the context of ancient Java and Siam, as well as to elaborate on its later relationships in the Malay power circuit of Johor and Riau – Lingga sultanates, and to explain the existence of a Malay royal settlement called Temasek, which dates to 14th century. Until now, Temasek had been mentioned in passing, as a small footnote in conventional history texts but not explicitly portrayed based on the information we had accumulated from historical texts, such as the late 14th century Daoyi zhilue 夷志略 by Wang Dayuan 汪大渊, a Yuan dynasty merchant, and the Malay Annals (Sejarah Melayu), and archaeological evidence excavated on 14th century sites on Fort Canning and mouth of Singapore River.⁽²⁾

Widening the context of Singapore history also meant that we could reach in to the depth of history in so many ways, entry points and perspectives. The search for a multiplicity of voice in history was the main driving force for us to create two simultaneous paths to bring to our visitors the message that there is always another side to one story.

The gallery is roughly divided into two paths – the Events Path in which the displays chronicled history with a capital letter 'H', telling history from the official, and often male, point of view. The other is called the Personal Path, in which the displays offered visitors information and points of view that were alternative to the official version. Small conduits were created so that visitors could weave between the displays and narratives of the Events and Personal paths. Some visitors wondered in and out unintentionally but that was actually our intention, because history never developed along one straight line.

Our unconventional approach was perhaps best demonstrated in the display about Sir Stamford Raffles, who was credited and celebrated for founding modern Singapore, landing on the island on 29 January 1819. This display told Raffles' story from the views of his wife (Sophia Hull: 1786 – 1858), his arch enemy (Major William Farquhar: 1774 – 1839) and the Malay ruler who submitted his power and sovereignty to the British. These were narratives much buried under the grandeur of Raffles' success, hidden for the convenience of a clean and complication-free linear narrative. Studying the standard textbook on Singapore history, one would easily forget that Raffles had spent less than three full years in Singapore after signing the treaty with Sultan Hussein (1776 – 1835) in 1819. In fact, immediately after the treaty was signed Raffles hurried back to British Bencoolen in Sumatra to resume his duty as Governor-General. One would never have appreciated the difficulties which William Farquhar faced when Raffles left him to govern Singapore with no budget nor governing support. In our version of history, the period between 1819 and 1822 was a story of Farquhar, who, with his affable personality, friendly network with the local and multi-ethnic business communities, made Singapore a spec-

tacular success. Under Farquhar's haphazard administration, both population and trade in Singapore grew rapidly. Although Farquhar had a huge fall out with Raffles, he was showered lavishly with gifts from the merchant communities when he was forced to leave Singapore.

The fact that Raffles is traditionally regarded as the first founder of Singapore was very much the good public relations work by his widow, Lady Sophia (née Hull), who wrote the two-volume *Memoir of the Life and Public Services of Sir Thomas Stamford Raffles*, in which she diligently documented her husband's work in Java, Sumatra and Singapore, thus gaining wide recognition for Raffles as Singapore's founder. In fact, in the gallery, it was the voice of Sophia visitors would hear. Sultan Hussein's perspective involved a longer and more complex process. As the sad story of Sultan Hussein was very much a result of succession disputes and power struggles inherent in the Malay court structure, an artistic decision was made to commission a short play to be written in traditional Malay storytelling. This way, we were able to create a complex context which involved the Malay court personalities, showing how their powers were weakened in the face of emerging armed European presence. The short play, though in English, was written to simulate the rhythm of Malay poetry and to cast a sense irony on the futility of the situation in 1819. This was how the dominance of Raffles in Singapore history was subverted. We were of course criticised by the more orthodox or textbook-bred audiences for downplaying the importance of Raffles.

Hence throughout the gallery which traverses nearly six hundred years, Singapore is portrayed through the eye of people of different social and economic backgrounds, women and children, victors and victims, officials and dissidents, masters and servants. All characters called in to help with the narratives of history have been researched from archives, historical records and research interviews.

To give our audiences a visualisation of ancient Singapore, we invested heavily in a 270-degree short film called *Sejarah Singapura* ("A history of Singapore") made for us by contemporary artist Ho Tzu Nyen. It is based on a series of tableaux he had created a few years earlier about the crisscrossing of myths and truths of the origins of Singapore. Drawing heavily from small pieces of information carried in travel accounts *Daoyi zhilue* by the Chinese Wang Dayuan the *Malay Annals* as previously noted, and *Suma Oriental* by the Portuguese Tomé Pires, scenes of the fragmentary narratives were created on screen.⁽³⁾ We filmed with ordinary folks who answered the call for audition, and on locations all over Singapore. The result was a stunning and meditative visuals that captured the spirit of the untold history of our past.

Objects displayed in the gallery were used as powerful tools to introduce tension, clips from oral history interviews conjured up emotive context for human stories that were essential in lending a personal perspective amidst larger historical events. To illustrate the disputes between the colonial administration and the burgeoning population over the boundary and use of public spaces in the city, we installed a huge funeral hearse far too large for the space in close proximity to three equally overbear-

ing portraits of British governors.⁽⁴⁾ To sinuate the unexpected quiet menace of the invading Japanese army in early 1942, who sneaked up on Singapore from the north, we created a display of cascading Raleigh bicycles, on which the Japanese soldiers were riding on upon their invasion.

In 2006, many Singaporeans were still suffering from history-phobia, and we felt the large Singapore History Gallery might be too overwhelming for history beginners. To allow such audience to take in history in moderate portions, we created four galleries which we said were about culture and lifestyle - fashion, food, photography and film (entertainment) . These galleries largely thematic and did not discuss history in a chronological manner, although social issues such as immigration, cultural hybridity, ethnic diversity, family structures were presented and discussed in the displays. The Food Gallery, for instance, was a deep dive into the roots of the multi-ethnic immigrant nature of Singapore society without political pretext. Riding on Singaporeans' passion in food, we explored the origins of Singapore street food and gave our immigrant society a rich historical explanation. The Photography Gallery was an excuse to showcase the vast museum collection of archival photographs, but in the end we found ourselves engaging in a discussion on the various permutations of family in historical Singapore. The gallery dedicated to film and entertainment was a good attempt in showing how the rapidly growing population in early 20th century was entertained: though street theatre, amusement parks and cinema. The Fashion Gallery was a remarkable space for us to explore women's modern identity in Singapore, for they rose up to the nation's call for economic development in the 1960s and 1970s to enter the work force in large numbers. Thrust into a world beyond their family comfort, how women dressed themselves was a journey of self-discoveries, navigation through fine lines of social background, financial status, ethnicity and values.

These four galleries showed the 'lighter' sides of history, and even if some audiences would visit them instead of the larger and more serious Singapore History Gallery, they would have learned the Singapore history from different perspectives and hopefully would appreciate this history as an under-explored territory of richness, complexity, multi-layered narratives.

In both the Singapore History Gallery and the Living Galleries, we used heavily audio and visual materials, archival ones in particular, because they are the most direct visual emotional connections to the exhibits and narratives. Where the original voices could not be made available, voice talents were carefully selected to read the texts to depict the stories appropriately.

As the content was far richer than any previous galleries we had experienced in, a great number of people were naturally involved in the research, writing, designing and in the highly complex production process, which included selection of artists, casting, line and post productions. No less than 450 individuals from the artistic community worked on the galleries – visual and conceptual artists, writers, actors, extras, voice talents, film directors, props masters, costumiers – alongside a team of curators, script writers and designers. Under this process, the curators were not the only people call-

ing the shots, but they had to share their creative and research process with a diversity of individuals who all gave input to make the galleries an experiential success.

Women's place in Singapore History

As Singapore's official history started around 1965, its brevity also meant that historians and museum curators would run out of things to say about the short 50 years, following the conventional nation building narrative. Creating the four Living galleries helped us develop new and different ways to write our history. Fortunately, the rapid development of Singapore into a world port by the early 20th century lured many immigrants from poverty-stricken areas to Singapore to seek work. Men were not the only ones who came. Many women were driven by the home conditions to become labourers in Singapore. One of the most visible female labour groups was the Samsui women, who were hard labourers on construction sites. They came from Sanshui ⁽⁵⁾ 广东三水 of Guangdong province and wore a uniform of red headdress and dark cotton outfit for work. Another group came from Shunde 广东顺德, also Guangdong province, to work as housekeepers throughout the British colonies of the East – Hong Kong, Singapore and Malaya. They wore a uniform of black trousers and white blouse. Apart from these two iconic female work groups, from the 1960s and 1970s thousands of women entered factories, or took up vocations such as seamstress, teachers, clerks, secretaries filling up the workforce of Singapore to drive the economy upwards as demanded by the new government. These became important topic for the National Museum to explore as exhibition themes.

The current enthusiasm of Singapore society in the heritage of local neighbourhoods testifies the importance of the kind of history that presents facts and facets that are different from the official and sanctioned versions. In the unique circumstances under which politics and great decisions are not widely opened to the public for participation, re-establishing one's spatial and historical roots to history outside the official framework has become a way of political awakening for many electorates. Perhaps we did a good thing creating more channels for Singaporeans to talk about our history.

A woman's place in the museum

When I became director of the National Museum, officially, in April 2003, it created ripples in Singapore's community of arts and culture. I was the youngest director, at 40, and the first female to hold such a position that had been hitherto male-dominated. It was news-worth, and I was enthusiastically received, positively portrayed in the papers. In retrospect, I can't help but feel that because I was a woman, the media and public extended to me more than usual generosity and warmth. This good head start, I believe, bought me the necessary time to tackle the mound of problems that had accumulated at the museum, and the need of leadership for the re-development of the Museum.

What most people neglected to notice under the novelty of a young and female museum leadership

was the fact that I was the first professional museum leader to emerge since Singapore's independence. As the museum was part of the civil service, inherited from the British, the choice of its leadership had been guided by a central belief in the elite system, which privileged carefully selected and groomed generalists over professional capabilities. Until my ascendance, the previous directors had been mid to high-ranking civil servants with no prior museum skills. I broke this tradition, taking up the position armed with 18 years of experience in curating and museum management, honed in learn-on-the-job process, mentored by knowledgeable and skilled curator-supervisors.

In fact, it is exactly my professional know-how that gave me an advantage over the other male directors of my time and my predecessors, since none of them had professional museum experience before they became heads of museums. Holding court with the architects and engineers of the re-development project was probably the more intimidating element of this period. Fortunately my curatorial insight and training gave me good grounding to shape the raw architectural concept into a functionally sound museum facility. I was also able to select and form a team of executives, advisors and consultants to fill in my inadequacies. I believe those colleagues without actual museum experience could not visualise drawings, organise objects, merge storylines and turn an architecture into a functioning institution.

The other tasks I had at hand required more long-term patience and foresight. I had to revitalise and re-organise the team at the museum by persuading the existing members to change, and by recruiting energetic ones to expand the staff base. I believe those colleagues without actual museum experience were unable to give accurate and useful guidance and clear direction when needed. Without prior hands-on working knowledge of the collections, my male colleagues and predecessors were unable to mobilise the museum resources, to exercise their imagination and to visualise for the museums which they were planning or running. Without track records of curating and exhibitions, my male colleagues and predecessors were unable to assess the quality and validity of options supplied to them and to offer technical solutions when problems arose.

In 2006, when we welcomed our first international partners from Vienna museums to install an exhibition on the Empress Maria-Theresia, many of the Austrian female curators observed that the newly opened museum had the touch of a woman. Although it was clearly a compliment to me personally, I think they could tell that the museum was built with professionalism, care and attention. At a personal level, I cannot deny that being a female, my professional concerns and perspectives might differ from the male's, but in the context of Singapore museums, I would like to think that my work at the National Museum of Singapore blazed a trail of possibilities for museums to be directed by museum professionals. Under the Singaporean elite governing system, the integrity of museum professionals is not always safe-guarded but has to be struggled for.

annotation

(1)——Raffles had been searching to establish a armed trading base in the archipelago, as the Dutch and Spanish had already developed strong trading posts throughout the islands of Southeast Asia. On 29 January 1819 Raffles and a small company of British navy officers landed in Singapore to meet the local ruler of Singapore, from whom he secured a treaty ceding the island to become a British colony, thus giving the British the strategic foothold of Penang, Malacca and Singapore, which later became the Straits Settlements.

(2) ——The remnants of the 14th century settlement were visible already in 1820s when the British colonial officers surveyed Fort Canning, which was known as the 'Forbidden Hill'. However, the earliest archaeological finds were discovered when a reservoir was being excavated on top of Fort Canning in 1928. This yielded some of the most important 14th century gold artefacts made in East Javanese style, and reinforced the notion of a royal settlement on the hill, and that Singapore was under the influence of East Javanese kingdom, the Majapahit. Systematic excavations would begin in Singapore only in

1984 onwards and more widely on Fort Canning, mouth and lower reaches of Singapore River, as well as under 19th century historical buildings. A full account and analysis derived from archaeological research of Singapore has been finally written and published by John Miksic in *Singapore and the Silk Road of the Sea, 1300-1800*. Singapore: NUS Press. 2018.

(3) ——See Miksic, *Singapore & the Silk Road of the Sea: I 1300 – 1800*. Chapter 4 “Singapore’s ancient history, 1299 to 1604”.

(4)——The scene would recall those lavish and crowded funerary processions organised for the death of prominent Chinese businessmen. On these occasions, public roads and spaces would be taken up often obstructing traffic and creating noises. On a more mundane level, shops often extended into public walkways or roadsides, which also breached laws governing usage of land and public spaces under the British colonial rule.

(5)——They were from Sanshui, which is the Mandarin and official pronunciation of the place. In their own dialect, it is pronounced as Samsui.

References

- Frost, Mark & Balasingham-Chow, Yumei. *Singapore: A Biography*. Singapore: National Museum of Singapore, Editions Didier Millet. 2010.
- Lenzi, Iola. *National Museum of Singapore Guide*. Singapore: National Museum of Singapore, Editions Didier Millet. 2007.
- Miksic, John. *Singapore & the Silk Road of the Sea: 1300 – 1800*. Singapore: National Museum of Singapore & NUS Press Singapore. 2018
- Raffles, Sophia. *Memoir of the Life and Public Services of Sir Thomas Stamford Raffle*, 1991 edition. London: Oxford University Press.
- Treasures from the National Museum of Singapore. Singapore: National Museum of Singapore. 1987 Pires, Tomé. *Suma Oriental*.
- Wang Dayuan 汪大淵. *Daoyi zhilue (島夷志略)*. 1349. Various editions.

(The Former Director of the Singapore National Museum)